

<オリエンテーション>

A. テーマ：キリスト教思想研究入門

「現代キリスト教思想史——弁証法神学から1960年代」

B. 目的

この特殊講義は、すでに系共通科目「キリスト教学講義A・B」を受講し、キリスト教思想研究に関心のある学部生、あるいはキリスト教研究の基礎の習得をめざす大学院生を対象に行われる。キリスト教思想研究を目指す際に身につけておくべき事柄について、またいかなるテーマをどのように取り上げるのかについて、解説を行う。

C. 到達目標

- ・キリスト教学をテーマとした研究（卒論・修論）を行うために必要な方法や知識を身につけることができる。
- ・キリスト教研究に関する広い知見をもとに、自主的な研究に取り組む能力を養う。
- ・キリスト教学をテーマとした研究を発表するための訓練を受けることができる。

D. 確認事項

受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（火3・水3）を利用するか、メール（Sadamichi.Ashina@gmail.com）で行うこと。

E. 授業スケジュール

本年度前期のテーマは、「現代キリスト教思想史（前半）」である。初回のオリエンテーションに続いて、次のような項目について、講義が進められる。一回の講義で一つの項目が取り上げられる。

- | | |
|---------------------|-------|
| 0. オリエンテーション+導入 | 4/13 |
| 1. 西欧近代とキリスト教 | 4/20 |
| 2. 19世紀キリスト教思想の遺産 | 4/27 |
| 3. バルト1 | 5/11 |
| 4. バルト2 | 5/18 |
| 5. ブルトマン1 | 5/25 |
| 6. ブルトマン2 | 6/1 |
| 7. ティリッヒ1 | 6/8 |
| 8. ティリッヒ2 | 6/15 |
| 9. H・R・ニーバー | 6/22 |
| 10. ホワイトヘッドとプロセス神学1 | 6/29 |
| 11. ホワイトヘッドとプロセス神学2 | 7/6 |
| 12. ハイデッガーと解釈学的神学1 | 7/13 |
| 13. ハイデッガーと解釈学的神学2 | 7/20 |
| (14. 20世紀キリスト教思想の遺産 | 7/27) |

フィードバック

<導入>

*現代神学における体系構想

A. 戦後・組織神学の歩みと課題（『福音と世界』2015. 8）

一 はじめに——組織神学とはいかなる学か

戦後 70 年の日本の組織神学の歩みを振り返り、今後を展望すること、これが本稿に与えられた課題である。しかし、この課題に取り組んでみてすぐに気付くのは、組織神学の歩みを辿ることは、思いのほか難しいということである。聖書神学や歴史神学については、その対象（聖書、古代教会、宗教改革など）に即してそれぞれの学問領域の輪郭を描くことは比較的容易かもしれない。では、組織神学はどうだろうか。キリスト論を取り上げれば組織神学になるのだろうか、あるいは古代キリスト教を代表する組織神学者オリゲネス（『原理論』の著者！）を論じれば組織神学的な研究と評価できるだろうか。また、戦後日本を代表する組織神学者として熊野義孝（『教義学』）を挙げることに異論がないとしても、北森嘉蔵（『神の痛みの神学』）はどうだろうか。というわけで、組織神学の歩みを振り返るためには、まず組織神学の輪郭を確定することが先決問題であることがわかる。そして、まさにここに現代の組織神学が直面する苦境・危機が存在するのである。

本稿では、組織神学について、とりあえず、次のような輪郭を設定することにしたい。これは、わたくしの専門領域の一つであるティリッヒの『組織神学』（第一巻・序論の議論）に依拠したものであるが、組織神学を広めに理解することを可能にする点で有益と思われる——以下におけるティリッヒの議論は事実上多くの組織神学に妥当するであろう——。たとえば、ティリッヒは、組織神学の使用する資料がほとんど無制限に豊富であるとして、「聖書、教会史、宗教史、文化史」の諸テキストや諸事象のすべてが組織神学に関連づけられ得ることを示唆する。実際、以下に見るように現代の組織神学が取り扱うべき問題はきわめて多岐にわたっており、ティリッヒの指摘に従えば、『神の痛みの神学』も十分に組織神学的著作と評することができる。つまり、『神の痛みの神学』は取り上げられた資料との関わりで聖書神学や歴史神学に数え得るとしても、聖書やキリスト教史に関連する資料の多さは、組織神学であることと矛盾しないからである——むしろ、「神の痛み」が資料を関連づける規範として設定されている点で、優れて組織神学的である——。なお、同様の理由から、本稿では、組織神学は教義学、倫理学、弁証学を包括するものと考えたい（『岩波キリスト教辞典』の近藤勝彦による「組織神学」の項を参照）。

では、組織神学は、手元に集められた膨大な資料をどのように扱うのであろうか。ティリッヒは、この資料群を「状況とメッセージ」という枠組みによって構造化し議論を進める。すなわち、組織神学者は自らが生きる「現代」（状況）と自らが立つキリスト教的伝統（メッセージ）との両極構造において資料を用いて作業を進めるのである。しかし、この点は聖書神学者も歴史神学者も実践神学者も同様であり、組織神学の独自性は、「組織」「組織化」という点に求められねばならない。本稿では、「組織」についても、根本原理（諸原理）から論理的に導出された知識の体系的な総体という意味に限定するのではなく、多様な資料を神学者の現在の視点から相互に関連づけることによって形成された知のネットワークをも包括するものと考えたい。このように考えると、諸資料を特定の視点から相互に関連づける作業を行う研究者はすべて「組織神学的」な研究を行っていることになるが——事実上また潜在的にそうである——、明晰な仕方でも論を進めるため、当面は明らかに組織神学に分類される文献に議論を絞りたい。ティリッヒはこの組織化を行うための視点を「規範」（Norm）と呼んでいるが、組織神学者は、聖書を中心に多岐にわたる諸資料を一定の規範にしたがって統合し、議論を行うのである。ティリッヒは、神学的知を組織

化する規範とキリスト教諸伝統を対応づけつつ、次のような具体例を挙げている。古代ギリシャ教会の「不死の生命と永遠の真理との受肉による有限的人間の死と誤謬とからの解放」の規範、ローマ教会の「神人の現実的で sacramental な犠牲による罪と壊滅とからの救済」の規範、「信仰による義認」と「聖書原理」とからなる宗教改革的規範（カルヴァニズムでは「予定説」の強調を伴う）、近代プロテスタンティズムの「人間存在の人格的、社会的理想を表す『共観福音書』のイエス像」、二〇世紀プロテスタントの「旧新約聖書における預言者的な神の国のメッセージ」。そして、ティリッヒの組織神学では「キリストとしてのイエスにおける新しい存在」である。もちろん、こうした諸規範は相互に排他的なものではなく、伝統に規定されたキリスト教的規範の内部における強調点の多様性と考えられねばならない。ここでは、組織神学の規範が神学者の所属する教派的な伝統と緊密な関連を有している点をご記憶いただきたい。

二 戦後 70 年の組織神学の動向

以上のように組織神学の輪郭を描いた上で、戦後 70 年の組織神学の歩みを概観してみよう。『日本神学史』（ヨルダン社）第二章で佐藤敏夫は、次のように論じている。

「戦前の一〇年間（昭和一〇年代）を振りかえってみると、そこに見出されるものは、バルト神学の圧倒的影響力」であり、「一種のバルト神学の正統主義化が生まれた」（一二〇頁）。「戦前から出発した神学は、このこととの連関において理解されねばならない」が、特筆すべきは「正統主義化されたバルトをどう乗り越えようとしたか」であり、その代表が北森嘉蔵の『神の痛みの神学』なのである（一二一頁）。

これは、戦後の組織神学の出発点を理解する上で重要な指摘である。なぜなら、後に見るように、バルト神学の規定する問題状況（バルト神学の正統主義化とそれに対する反論）から多様な争点・テーマへの解体という動きこそが、戦後の世界的な組織神学に特徴的な動向であり、日本の組織神学はそれに大きく規定されているからである。本来ここで、この七〇年間における日本組織神学の成果を列挙すべきと思われるが、紙幅の関係上これは省略せざるを得ない。関心のある方は、日本基督教学会の学会誌『日本の神学』に書評が掲載された組織神学関連文献をご覧いただきたい（<http://www.gakkai.ac/jscs/journal/>）。ちなみに、『日本の神学』創刊号（一九六二年）で、山本和は、日本における「教理学・組織神学」の戦後史を第一期（一九四五―五五）、第二期（五二―五六）、第三期（五七―六二）に区分しているが、取り上げられる文献は、通常の組織神学の範囲を超えて、聖書神学、歴史神学に及んでいる。

バルト神学を軸とした問題状況から出発した戦後日本の組織神学——もちろん わたくしが比較的深く関わっているプロテスタント神学の動向（の一部）を中心に述べればではあるが——は、大学の神学部や神学校における教育カリキュラムの主要科目として設定され（「組織神学」以外の名称も含めて）、そこでは専門講義や演習が行われ、その成果は膨大な論文や著書として刊行されてきた。何よりも海外の著名な組織神学者（特にバルト、ボンヘッファー、モルトマンなど）に関連した翻訳はきわめて盛んである。

一見すると、組織神学は活況を呈しつつ現在に至っているとの印象を受けるかもしれない。しかし、この圧倒的な成果の下に、日本における組織神学研究の危機的状況が潜んではいないだろうか。たとえば、組織神学者が所属していることが期待される日本組織神学会であるが、少なくともわたくしが関わりをもつようになった一九九〇年代以降（わたくしは一九九三年と二〇〇四年に学術大会で研究発表を行い、二〇〇三年～二〇〇四年まで学会委員を務めた）、学会活動はきわめて低調であって、現在は活動停止状態にある（と

思われる)。日本組織神学のこの現状にはさまざまな要因がからんでいるものと思われるが、日本における戦後 70 年の組織神学の状況がここに一定程度反映されていることは否定できないであろう。組織神学の活況についても、その中身をよくよく点検すれば、海外の著名な組織神学者についての個別的な思想研究がその大半を占めており、日本人組織神学者のオリジナルな思索に基づく組織神学体系は、わずかな例外を除いて、いまだ具体化されていないのである（この例外として、本稿執筆中に急逝された栗林輝夫の『荊冠の神学——被差別部落解放とキリスト教』が挙げられる）。

本稿では、この日本の組織神学の危機的状況について、いくつかの論点を提示することによって、戦後 70 年の歩みを分析し、課題を示すことを試みたい。まず、指摘すべきは、日本の組織神学は、良くも悪くも欧米の組織神学の輸入・翻訳を中心に動いており——翻訳は学問の最重要基盤であり、良質な翻訳が次々現れることは決定的な長所であるが、しかし、それだけでは神学としてあまりにも未熟である——、フェミニスト神学が低調であるなどの点は別にして、日本での動きは世界的な神学動向をもっぱら後追いする仕方で推移してきている点である。ここで、森田雄三郎による戦後から一九八〇年代までの欧米の神学状況についてのコメントを引用してみたい（森田雄三郎『現代神学はどこへ行くか』（教文館）に所収の「現代神学の動向」より）。

「バルトやブルトマン、あるいはティリッヒやニーバーといったいわゆる大物が存在せず、まさに神学の戦国時代に突入した感がある。」（三二頁）

これはそのまま日本の神学状況にも当てはまる。そして、「六〇年代以後に現われた新しい神学的動向のうち有意義を思われるものだけを挙げるならば」として、森田は、「解釈学としての神学」、「歴史の神学（宗教学・宗教史の神学、科学論の神学）」、「希望の神学・革新の神学（解放の神学）」、プロセス神学の四つの流れを取り上げ、それぞれについて分析を行っている。森田による分析の中身をここで紹介することはできないが、欧米のプロテスタント神学が、バルト以降（一九六〇年代後半以降）、急速に多様な方向へと分岐し、組織神学の全体的な動向なるものを描くことがもはや困難になっていることは明瞭であって、これが日本の組織神学の現状を規定していることに留意しなければならない。

実際、現代の歴史的思想的状況が組織神学に突きつけている問い（→争点）は、科学技術、環境、いのち、性、多元性、国家、戦争など、きわめて多岐にわたっており、組織神学は混沌とした状況にある。こうした混沌の中で膨大な資料を組織化することがいかに困難な作業であるかは容易に想像できることであり、ここに、現代において伝統的な形態の組織神学が困難に陥っている理由の一つが見出される。研究者の関心も実際の仕事も、神学的知の体系化から個別的な諸問題・諸テーマへとシフトするのは当然の成り行きかもしれない。多様化は一方では知の豊かさの母体となるものであるが、他方で、過剰な多様化はむしろ知の専門化と縮小とを帰結することになりかねない。知の縮小傾向のもとでの専門化は組織神学を陳腐化させ窒息させる恐れがある（これは神学教育における組織神学の困難さとも無関係ではない）。

この問題・争点の拡散とそれに伴う組織神学の解体という事態（＝複雑な問題状況を組織神学として統一的に解釈し批判する視点が見出しにくい）をさらに掘り下げて分析するとき、その背後に見えてくるのは、近代的知の特有のあり方（制度的再帰性とその帰結）であり、先に見た「規範」の問題は、これに関連している。そこで、次に近代的知の問題へと視野を広げ、そこから規範の問題に戻ってくることにしたい。

三 近代的知の状況とその帰結

四 むすび

B. 書評：芳賀力『神学の小径Ⅲ 創造への問い』キリスト新聞社、2015年。

教義学を構築するのが困難なこの時代に、創造論をテーマとした本格的な神学書が刊行された。二〇〇八年から五冊のシリーズで刊行されている神学体系構想の待望の三冊目である。三位一体論に基づく神学体系を展開している点で、構想された教義学はオーソドックスではあるが、内容的には旧約新約聖書や古代教父から宗教改革、そして現代の自然科学の知見まできわめて多彩であって、読者は筆者の知的世界の豊かさに接することができる。また、各章は「本文、ノート、幕間のインテルメッツォ（間奏曲）、あとがきの命題集」という構成になっており、明晰な論述（本文＋命題集）と掘り下げた論述（ノート）のバランスが取られ、各章の記述・議論に広がりともまとまりを与えている。

・・・

以下、本書の豊かな内容から特筆すべきポイントを紹介したい。

キリスト教的創造論は、古代の神話世界（自然崇拜）から人間を解放し、古代から現代まで持続する思想世界（起源の絶対的二元論あるいは反物質主義としてのグノーシス主義→グノーシス・シンドローム）を論駁することによって自然肯定を可能にしてきた。この点でキリスト教的創造論は近現代の自然科学と対立するものではない。つまり、カルヴァンの聖書解釈論とその「適応」論が示すように、「近代のキリスト教がすべて自然科学を反信仰的なものとして排斥したわけではない」（87）のである。それどころか、「近年特に天文学の分野で、宗教と科学は互いにその知見を交流しつつある」、「無からの創造という聖書的教説に限りなく近い」（89）。もちろん、ドーキンスなど宗教を批判する科学者は存在するが、それが「科学的知見の越権行為」（99）であるという筆者の指摘は、明解かつ的確である。こうした現代科学との関わりは、聖書にもとづく改革派的な神学、つまり「三位一体の神の、外に向かう愛の業」としての創造と、その「創造の内的根拠」として契約という神学的根拠から論じられているのである。

以下省略